

群 教 セ	F09 - 01
	平 15.217集

人間関係の育成を目指した、不登校問題の 予防的・開発的な取組の工夫

－ 生徒のコミュニケーション能力を高める

「ほっとルーム」の有効的活用を通して －

特別研修員 泉 あけみ （小野上村立小野上中学校）

＜ 研究の概要 ＞

本研究は、「ほっとルーム」に相談室的機能・学習室的機能・ピア・サポート演習室的機能の3つの機能を持たせ有効活用する。演習室的機能では、中学2年生全体を対象にピア・サポートトレーニングを行い、コミュニケーション能力を高め、生徒同士の人間関係を豊かにしてきた。これらの取組を通して、教師と生徒の信頼関係や、生徒相互の良好な人間関係の育成を目指し、不登校問題の予防的・開発的な取組の実践を行ったものである。

【キーワード：ピア・サポート コミュニケーション 不登校問題 ほっとルーム】

主題設定の理由

本校は、全校生徒が60人という小規模校で、生徒は幼稚園・小・中学校単一クラスで慣れ親しんだ仲間と生活している。また、家庭環境を見ると三世代家族が多く、落ち着いた生活を送っている。しかし、昔からの先入観にとらわれやすい傾向もある。

全体的には、授業の中で教師と生徒のやりとりが活発に行われたり、休み時間やグループ活動などで生徒相互のコミュニケーションは比較的よく行われている。しかし、部分的に見ると、人間関係が固定化の傾向にあり、コミュニケーションが特定の仲間に限られ、グループに入れず孤立してしまう生徒や、一分間スピーチで口ごもってしまう生徒、思いやりに欠ける言動が見られる生徒もいる。また、学校の中では積極的に発言できても、校外に出ると萎縮してしまい、思ったように自己表現できなくなってしまう生徒もいる。そのため、コミュニケーション能力育成の必要性を感じる。

そこで担任している2年生に、ピア・サポートトレーニングを通して、自己理解や他者理解を図り、話の聴き方や話し方のスキルなどを身につけさせる。また、お互いが支え合うことを学んだり、他者を思いやる経験をしたりするなかでコミュニケーションを深める。

そして、既存の心の教室を「ほっとルーム」とし、悩み相談の場としての相談室的機能、学習の質問を受けたり補充学習を通して、教師と生徒のコミュニケーションを深める場としての学習室的機能、ピア・サポートトレーニングを企画・運営する演習室的機能として活用する。

教師と心の相談員とが連絡・調整を密に行い、双方が連携して生徒の心の様子に気を配り、「ほっとルーム」のこれら3つの機能を活用すれば、教師と生徒の信頼関係が深まり、生徒同士の人間関係も豊かになるだろう。これは、生徒にとって充実した学校生活を生み出すとともに、不登校問題の予防的・開発的な取組にもなると考え、本研究主題を設定した。

研究のねらい

「ほっとルーム」に3つの機能を持たせ、教師と心の教室相談員が連携して「ほっとルーム」

を活用していく。生徒とのコミュニケーションを通して信頼関係を深めたり、問題を未然に防ぐようにチャンス相談や支援を行ったりする。さらに、ピア・サポートトレーニングをすることで、生徒相互のコミュニケーション能力を育成する。これらの取組が、より良好な人間関係を作り、不登校問題の予防的・開発的取組として有効であることを実践を通して明らかにする。

研究の内容と方法

1 「ほっとルーム」の環境整備

教室とは違った、気分がくつろげるような空間を演出する。

教職員の共通理解を図る...教職員が「ほっとルーム」設置のねらいや相談員の役割を共通理解する場を年間計画に位置づける。

組織的な対応...心の教室相談員が不在のときにも、学校として連続した活動を円滑に維持するという点で生徒へのケアを一定に保っていく。

教育相談担当...心の相談員が不在の日の昼休みに、「ほっとルーム」を運営する。

問題傾向がある生徒については、心の相談員と連携して、問題の改善が図れるよう「ほっとルーム」の活用を図る。

心の教室相談員・養護教諭・教育相談担当・担任等が、情報交換を密にし、生徒の心の変容に早く気づき、その生徒への適切な援助・指導ができるような人間関係や体制を築く。

学級担任による、生徒への「ほっとルーム」利用を啓発する。

2 「ほっとルーム」の活用

(1) 3つの機能

生徒相互または生徒と教師とのコミュニケーション能力を高める場として活用するために、次の3つの機能を持たせる。

相談室的機能

学習室的機能

ピア・サポート演習室的機能

特にピア・サポートの演習として、2年生全体を対象にピア・サポートトレーニングを行う。

(2) ピア・サポートとは

ピア・サポートとは、構成的グループ・エンカウンターやソーシャル・スキル訓練で学んだスキルを基礎に、さらに他者を支援するための援助スキルを身につ

け、学校生活の中で、様々な不安や悩みを持つ子どもたちに対して、支援の実践をすることを通して、サポーター自身の人間としての思いやりや支え合いの心を一層豊かにし、この活動を通して、他の生徒にも影響を与えようとする活動である（森川澄男、2002）。

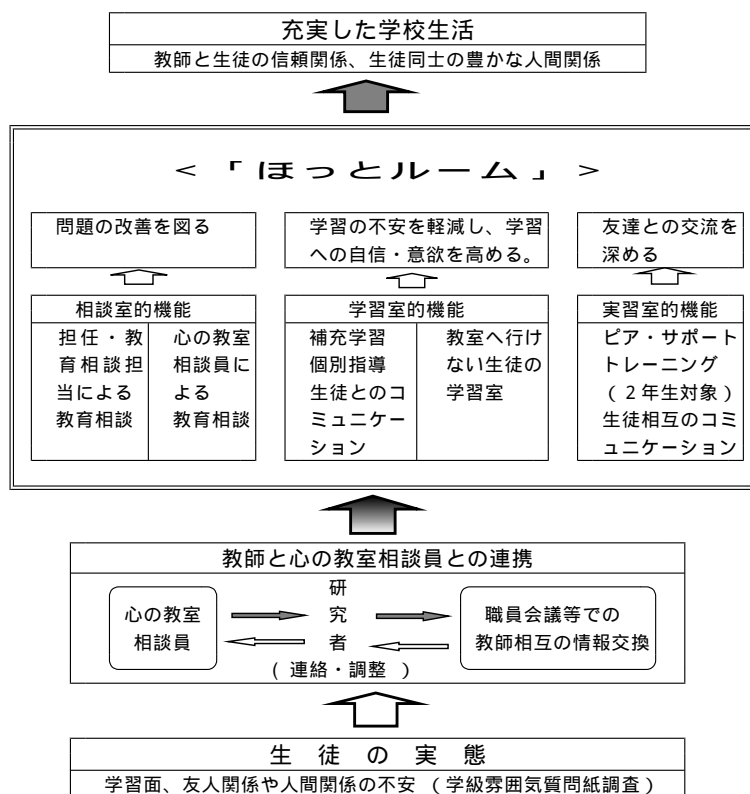
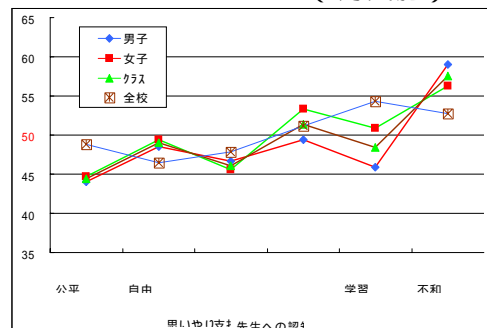


図1 研究の全体構想図

(3) なぜ2年生全体にピア・サポートトレーニングが必要か

学級雰囲気質問紙調査(資料1)から、2年生は公平感・思いやり支持が低く、不和感が高い傾向にある。これは人間関係が固定化し、いい意味でも悪い意味でも、お互いを見る目が固まっている傾向があり、過去にあった出来事で作られたイメージを払拭するのが難しい現状にあることが原因の一つと思われる。そこで、話の聴き方・話し方など友達との関わり方や、自己理解・他者理解を図る学習をすることにより、今までの自分や友達に対する固定化されたイメージを払拭させる。また、トレーニングのなかで思いやりや支え合いの心が育ち、学級集団の人間関係を改善することができると思われる。

資料1 学級雰囲気質問紙調査結果 (6月実施)



研究の概要及び結果と考察

1 研究の概要

「ほっとルーム」の機能は次のとおりである。

表1 「ほっとルーム」の機能

機能	担当者	具体的内容
○相談室的機能	・心の教室 相談員 ・担任 ・教育相談担当	担任と違う立場で生徒の話聞き、生徒の成長を促す。生徒との信頼関係を大切に、生徒の自立を助けていく。 ・気軽に相談できる場 ・生徒の話をじっくり聞く場 ・本音や迷い、悩みを出せる場 ・生徒の良さを見つけて、自信を回復する場 ・生徒が自分の心をのぞき、伝え合える場 ・教室に入れない生徒の教室復帰するための「ステップ」の場 ・保護者にとって「開かれた」場
○学習室的機能	・教科担任 ・教育相談担当 ・研究者	・生徒と自由に雑談したり、勉強の質問に答えたりして、生徒とのコミュニケーションをとる。 ・教室へ行けない生徒への学習指導
○ピア・サポート演習室的機能	・研究者	・生徒によるピア・サポートの練習・実習 (生徒同士の会話や学習の教え合いなど) ・「ほっとルーム」に来室した生徒たちの相互コミュニケーションが促進されることを目指す。 ・2年生全員を対象として、ピア・サポートトレーニングを行う。 ・各活動のリーダーを対象として、ピア・サポートトレーニングを行う。

(1) 相談室的機能

心の教室相談員来校日には、1年生を中心に毎回4, 5名が来室している。心の教室相談員は、生徒たちのつらい気持ちを受けとめ、秘密を守って話をしている。話の内容が気になるときは、担任に話をするようにしている。現在は深刻な相談はなく、生徒がリラックスして気分転換できる場となっている。教師が行うチャンス相談も、落ち着いた安心できる雰囲気の中で行っている。また生徒同士の相談の場ともなっている。

資料2 「ほっとルーム」



(2) 学習室的機能（昼休み）

ア 運営方法

心の教室相談員が来校しない日は、教師が昼休みの「ほっとルーム」を運営してきた。教育相談担当だけでなく、できるだけ多くの教師に、1ヶ月に一度程度、昼休みの「ほっとルーム」運営の協力を依頼し、生徒と雑談したり、ゲームをしたり、勉強の質問に答えたりしながら、教師と生徒とのコミュニケーションを図る場として活用した。

イ 生徒へ「ほっとルーム」利用の啓発

「ほっとルーム」の利用（資料3）を学級に掲示したところ、普段から「ほっとルーム」に来室している生徒は、「今日は先生だよ」と言って、いろいろな教師とコミュニケーションをとることを楽しみにしている。また、今まで「ほっとルーム」に来室していなかった生徒も気軽に来室できるよう

「今日は先生が昼休みに「ほっとルーム」へ行くから、分からないところがあったらおいで。」と授業が終わったときに声をかけておくと、数名の生徒が質問を持って来室してきた。

ウ 「ほっとルーム」での生徒の様子

「ほっとルーム」では、学力が低く友達も少ない生徒が、昼休みに勉強を教えてもらうことを一番喜んだ。一対一で勉強を教え、家での勉強の仕方も話したりした。

「ほっとルーム」で学習することを通して勉強に意欲を持ち、自分のできる努力を始めた。

また、期末試験を機に、「ほっとルーム」に3年生が質問をしに来室するようになった。数名が勉強のために「ほっとルーム」に来室したときには、生徒同士がお互いに教え合ったり、相談したり、

ほめ合ったりしながら「ほっと」な雰囲気の中で勉強をしていた。生徒は、「ほっとルーム」で気軽に質問ができるようになると、授業中でも積極的に質問したり発言するようになった。「ほっとルーム」では、分かるまで気軽に質問できるので、生徒は「分かった」「出来た」という満足感を持つことができていると考えられる。

(3) ピア・サポートの演習室的機能

教師の「ほっとルーム」担当の日には、生徒同士の教え合いも自然と行われ、一緒に考えたり、励ましや褒める言葉も自然と交わされたりするなど、生徒相互のコミュニケーションも盛んに行われていた。また、ピア・サポーターとして、友達をサポートするための基本的資質を磨くために、今年度は2年生全体を対象に、話の聴き方・話し方の学習や、自己理解・他者理解を深めるなど、自他の人格や考え方を尊重し、人と上手に関わっていく態度を習得させ、より良い人間関係作りができるよう、道徳や学活、総合の時間を活用して、ピア・サポートトレーニングを行った。

資料3 「ほっとルーム」の利用

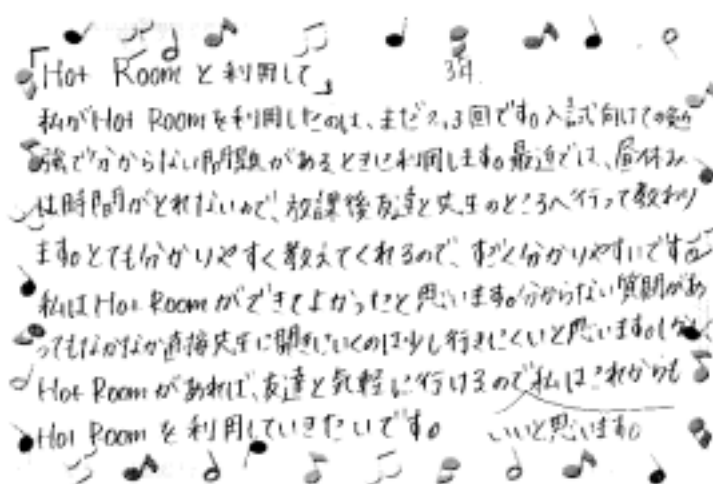
ホットルームの利用 <12月の予定>

よろしくお願いたします。



月	火	水	木	金
1 心の相談日	2 A先生	3 B先生	4 C先生	5 心の相談日
8 心の相談日	9 D先生	10 資料室 E先生	11 心の相談日	12 F先生
15 心の相談日	16 E先生	17 G先生	18 心の相談日	19 心の相談日 生徒総会
22 心の相談日	23	24 2学期 終業式	25	26

資料4 生徒の感想



2年生全体を対象としたピア・サポートトレーニングの主な実践は表2のとおりである。

表2 ピア・サポートトレーニング

活動内容	生徒の活動	生徒の振り返り	教師の支援
リレーション作り、 (自己理解・他者理解・話の聴き方)	・友だち集め ・宇宙遊泳 ・ほめほめシャワー60秒 ・聴くと聞く	・普段話さない人とも、しゃべったりふれ合ったりできた。 ・友達の意外なことに気づきびっくりしたり、楽しかった。 ・いろいろほめられて嬉しかった。	・固定化した人間関係を崩し、誰とでも楽しくふれあう経験をさせる。
1年生と2年生とのリレーション作り	・何でもバスケット ・友だち集め ・話の聴き方、話し方 ・人間知恵の輪	・今までより1年生と仲良くなれた。1年生と会話したりして、発見が多かった。 ・コミュニケーションが大事だということが分かった。コミュニケーション次第で気持ちが変わったりすることも分かった。	・男女、1,2年生が入り交じって活動出来るようにする。
話しの仕方 (攻撃的な言い方・受け身的な言い方・主体的な言い方)	・アイウエオ語で自分の気持ちを表現する。 ・3通りの言い方で試してみる。	・アイウエオと言ってるだけでも、声の大きさや表情で感情が伝わってきた。 ・攻撃的だとけんかになる。受け身的だと相手がつけあがる。主体的がいいと思った。 ・主体的な言い方なら、素直に聞けた。	・同じ言葉でも、言い方によって、相手への伝わり方が全く違うことを理解させる。
ハンディキャップ体験 (擬似体験グッズを装着して歩行・文字の読み書き・階段昇降・トラストウォークなどの体験)	グッズを装着して擬似体験する。擬似体験をしている友達をサポートする。第三者として、友達の様子を観察する。	・サポートしてもらったら、とても気持ちよかった。 ・相手の気持ちになって、「自分ならこうしてもらいたい」という行動を進んでやっていきたい。 ・お年寄りが作業をゆっくりしていても急がせない。 ・困った様子のお年寄りや体の不自由な人を見かけたら勇気を出して助けたい。	・障害があっても自分で出来ることをたくさんあることを理解させる。 ・サポートしてもらって喜びや安心感を体感させる。 ・本当のサポートを考えさせる。
福祉センターでのお年寄りに支援活動する計画・準備	・お年寄りの障害の個人差に応じて、カレンダーが作成できるように工夫する。	・お年寄りに合わせて、数字や絵を大きくしたり、飾り付けができるようにした。 ・色を濃くしてわかりやすくし、また、切り取って好きなものを貼れるようにした。 ・貼るための絵は、色を塗ってあるものがないもの、切ってあるものと、ないものを作った。	・お年寄りが自分で楽しんで作れるよう、個人差に対応できるように工夫させる。
お年寄りへのサポート体験	・お年寄りを支援しながら、1月のカレンダーを作成する。	・左半身が不自由なので、紙をおさえてあげたり、糊をぬって貼りたいという場所に置いてあげた。「ありがとう」と言われるのがとてもうれしかった。 ・少し手が不自由だと言いながらも、自分でできることは自分でやりたいと言っていたので、それを出しっぱりすぎずサポートするのが少し難しかった。	・どんなサポートをしたら、お年寄りが自分で制作できるか考えて、その人の自立に向けたサポートを工夫させる。

資料5 ハンディキャップ体験



資料6 お年寄りへのサポート体験



2 研究の結果と考察

(1) 生徒のコミュニケーション能力が高まったか

「ほっとルーム」を学習室的機能として活用し、勉強の質問に答えたり、雑談をしたりしながら生徒とコミュニケーションを多くとることにより、生徒は授業中でも積極的に質問や発表をするようになった。また、「ほっとルーム」を相談室的機能として、心の教室相談員が相談にのったり、生徒の変容が見られたときには、教師がチャンス相談をして生徒の話をじっくりと聞くようにしてきたため、生徒は好んで教師とコミュニケーションをとるようになった。

それに伴って、生徒は毎朝提出する生活の記録に、心配事や悩みなど心の内面を知らせてくれることが多くなった。それに返事を書いたり、声かけをしたり、チャンス相談をしたりすることで、生徒と一層心がつながり、心のサポートをすることができてきたと考える。

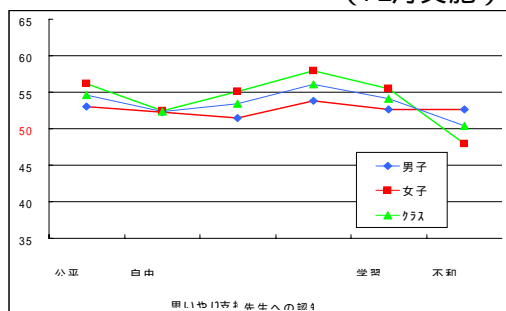
これらの取組が日常生活の中で生かされ、友達をけなす言葉が聞かれなくなったり、誰とでもグループを組んで、自分勝手な行動をせず協力して活動したりできるようになった。無口で、自分の気持ちを言葉で表現することに大きな抵抗を示していた生徒が、教師の問いかけにもしっかりと応答し、友達とも表情豊かにコミュニケーションをとるようになった。これはピア・サポートトレーニングを通して自己開示するを経験し、自分の気持ちを言葉で表現することへの抵抗が軽減されたためと思われる。また、友達や後輩に対して、励ましや助言など、温かい言葉がけやサポートが自然と行われるようになったのは、思いやりや支え合いの心が豊かになったためと考えられる。

(2) 不登校問題の予防的・開発的な取り組みとなったか

生徒は、悩みや問題があることを教師に打ち明けたり、心のメッセージを送ってくるようになった。これは生徒の心の変容に素早く気づき、チャンス相談や声かけをしていくうえで大変重要なことだと考える。教師からのチャンス相談や、友達を支えたり、支えてもらったりするピア・サポートの精神が、生徒たちの自力解決の力となっているようである。

資料7 学級雰囲気質問紙調査結果

(12月実施)



研究のまとめと今後の課題

「ほっとルーム」に3つの機能を持たせたことは、生徒へのチャンス相談ができたり、教師と生徒のコミュニケーションが深められたりと、生徒と教師の信頼関係を築くうえで有効であった。また、勉強面では生徒に「出来た」という喜びと、家でも勉強を頑張ろうとする意欲を持たせることができた。ピア・サポートトレーニングでは、固定化した人間関係を払拭し、自己理解や他者理解をすすめて、お互いが支え合うことを学び、他者を思いやる気持ちが生じ、生徒同士の人間関係を豊かにするうえで有効であった。

今回は、ピア・サポートを行ううえでの素地作りとして、2年生全体を対象としたピア・サポートトレーニングのみしか行えなかったが、今後は部長や生徒会本部役員など、リーダーとして活躍する生徒を対象としたピア・サポートトレーニングも行い、生徒自らの力で、充実した学校生活を生み出せるようピア・サポーターを育成していきたい。

<主な引用・参考文献>

- ・中野 武房・日野 宜千・森川 澄男 編著 『学校でのピア・サポートのすべて』 ほんの森出版 (2002)
- ・滝 充 編著 『ピア・サポートではじめる学校づくり 実践導入編』 金子書房 (2002)
- ・教育技術 MOOK 『人間関係を豊かにする授業実践プラン』 小学館 (2003)
- ・森川 澄男 監修・菱田 準子 著 『ピア・サポート指導案&シート集』 ほんの森出版 (2002)